

希望の物語、つなぐ声

福井愛朝^{ふくい まあさ}

(千葉県／私立市川高等学校三年)

1. 石を集める少年

その少年に出会ったのは近所の公園であった。当時私は小学校四年生で、この町に引越してきて間もない頃であった。その頃の私は、なかなか新しい学校に馴染めず、休日もいつも一人だった。その少年は「空(くう)ちゃん(※1)(仮名)」といった。空ちゃんは私と同じくらいの歳に見えたが、とても不思議な子どもだった。いつも公園で石を集めており、いつも彼のポケットにはきれいな小石が入っていた。その一つ一つに名前があり、空ちゃんは嬉しそうに、それがどんな石か話してくれた。私のお気に入り、漆黒の「宇宙の石」だった。彼によれば、遠い星に住む宇宙人が、この

地球に来た際に落としていったものだそう。漆黒の中のきらきら光る結晶を覗き込み、その星に住む人々を想像しながら、私はどこかに逃げたかったのかもしれない。空ちゃんは、その他にも純白の「雲の石」や花緑青の「バッタの石」などたくさん石を見せてくれた。友達のない休日の寂しい私の心は、彼の「物語」にどれだけ救われたのだろう。しかし、学校にも慣れ友達ができるにつれ、私は公園に行かなくなっていく。五年生のころには、もう空ちゃんと会うことはなくなった。「宇宙の石」は、実家の机の引き出しに静かに眠っている。あまりに私が欲しがるので、空ちゃんは口を尖らせながらも、その石を私にくれた。「この石は世界に一つ」という彼の声を、

今更ながらに思い出す。

2. 物理の教科書と月のウサギ

私の心は、両立しない二つの存在(※2)のジレンマに苛まれている。私は小さい頃、エリック・カールの『パパ、お月さまとて!』という絵本が大好きであった。娘のモニカに「お月さまとて」と言われた父親が、長いしごを月に架け、月をとってくる「物語」である。絵本を読みながら、私だつて月まではしごを架け、月がとれるような気がした。その頃の私にとって、月は私と同等の存在であり、友達であり、モニカは私自身だったのだ。ところが、成長するにつれその思いは変化していく。物理や化学の教科書のとおり、月はロケットを使わなければ行けない遠い場所の、酸素やケイ素からなる単なる岩石の塊になった。そして、月にウサギなどおらず、サンタクロースも妖精もない世界を、いつしか当たり前だと思うようになった。高校生にもなつて「月にウサギがいる」だなんて、なんて幼稚で非科学的なんだと。しかし一方で、月のウサギやサンタクロースは本当に存在しないのか、本当に彼らの存在を信じる気持ちは、幼稚で笑われるべき無価値な

ものであるのか、とも思っている。小さい頃の、風も雲も鳥も虫も友達と感じたあの豊穣な気持ちを忘れまいと抵抗しているかのように。そこで私はもう一つの認識を創り出す。月のウサギやサンタクロースは精神的で主観的な存在であり、私の心の中に存在する、と。世界を物理的で「客観的な存在」と、精神的で「主観的な存在」とに、二つに分けて理解するのだ。そうすることで、主観的な存在を守ろうとした。私の心は、客観的な存在が主観的な存在を否定しながらも共存する、という不思議な二元論（※3）のジレンマに陥っている。マルクス・ガブリエルは、このような二つの存在のジレンマを、多くの現代人も抱えていると述べて、それを「ギャップ」と表現した（※4）。例えば「人の精神活動は脳の中の電気信号に過ぎない」と学んだ私が、週末に神社で家族の幸福を祈るように、私たちは、たとえ客観的な存在が主観的な存在を否定しようとも、主観的な存在を大切に守ろうとする。なぜだろうか。

ミヒヤエル・エンデの『モモ』も、私の大好きな物語の一つであった。高校生になってもう一度読み返し、その理由がわかった。モモたちが守ろうとした時間は、自分

が意味ある自分として生きていく、主観的な存在（後述の質的な価値をもつ存在）として生きる時間である。反対に灰色の男たちは、そうした時間を取り上げ、代わりに意味のない客観的な存在（後述の量的な価値をもつ存在）として生きる時間を押し付ける。私がこの物語を大好きだったのは、モモが守ろうとしたものは実は私が守ろうとしたものであり、モモは私の代わりに闘ってくれる分身であったからだ。モモの物語は、私を救ってくれる物語なのだ。この物語が示すように、私たちは灰色の男たちが押し付けるような、意味のない客観的な存在だけで創られた世界では生きてはいけない。私たちが生きるためには、意味や意味を示す主観的な存在が必要であり、それゆえ、私たちはそうした存在を守ろうとするのではないだろうか。

一方、非科学的という理由で、客観的な存在が主観的な存在を否定することは正しいことなのだろうか。私たちが月のウサギを非科学的と否定する根拠には、唯物論を含めた自然主義の考え方が存在。自然主義が正しいとするならば、存在するものは全て物質とエネルギーであり、その存在を自然科学の理論で説明できなければならない

（※5）。しかし、デイヴィッド・J・チャーマーズが「意識のハードプロブレム」と説明しているように、精神的で主観的な存在―特に「意識」―は、物質やエネルギーではなく、現段階の自然科学の理論では説明できない（※6）。説明ができない以上、現段階では客観的な存在が主観的な存在を否定する根拠はなくなる。また、学校の物理の授業で量子力学の話を聞いた。ハイゼンベルクの不確定性原理の不等式（※7）が示すとおり、量子力学では、人間の観測が重要な意味をもつ。こうした量子力学の考え方は、主観的な存在をないがしろにせず、二つの存在をつなげて世界を理解した方がよいと、私たちに再考を促しているのかもしれない。ハイゼンベルクが「この世界を主体と客体、内的世界と外的世界に分ける習慣的分類は納得がいかない」と述べたように、いつか、客観的な存在と主観的な存在は統合され、私たちの不思議な二元論のジレンマも解消するかもしれない。

いづれにしても、私たちの不思議な二元論は不完全で、世界を正確に記述してはいない。しかし、この不完全さが、二つの価値の分離と社会全体での質的な価値の喪失につながっている。このことについて次に

述べる。

3. 量的な価値という麻薬

現代において主観的な存在の価値は低く扱われがちだ。芸術鑑賞など一部の場面を除き、客観的価値と主観的価値が葛藤する場面では、月のウサギと同様、自分の個人的な意見は、主観的、あるいは客観的でないというだけで揶揄されることが多い。科学的なエビデンスは何処にあるのかと。企業は客観的な数値目標を掲げ、数値によって自身を評価する。社会の豊かさを測る指標もまた数値だ。かくいう私たち受験生も偏差値によって輪切りにされ、大学の合否の多くは点数化された価値によって決まる。それらを批判すれば、人間には様々なバイアスがあり、主観的なものは信用ならない、公平ではない、ヒューマンエラーはもう要らない、と声が返ってきそうだし。しかし、主観的な存在の価値は、客観的な存在の価値に比べ本当に低いのであろうか。私たちは客観的な存在と主観的な存在を、目に見える実体があるかどうかで分けられているのではない。私たちは、客観的な存在を数値や数式及びアルゴリズムで記述できるものとし、主観的な存在をそれらでは

記述できないものと考えている。前者のもつ価値を「量的な価値」、後者のもつ価値を「質的な価値」と定義しよう。例えば「赤色」を「RGB表色系において「000」の波長」と記述した場合、これは客観的な存在すなわち量的な価値をもつ。また「イチゴの色」や「私の好きな色」等と記述した場合は、主観的な存在すなわち質的な価値をもつ。質的な価値は、言葉や文脈及び物語（物語の定義は後述）で記述可能だ。「悲しい」という感情も同様に説明できる。感情を「脳の中で電気信号によって起こるもの」と記述した場合は量的な価値、「大切な人を失った時の気持ち」と記述した場合は質的な価値を表している。その他、資料1にまとめておいたので参照してほしい。ユヴァル・ノア・ハラリの述べる「共同主観的な現実（以下、虚構）（※8）」も、同様に二つの価値の定義を使って説明できる。例えばお金の概念は人間が生み出した虚構の一つであり、概念そのものは主観的で質的な価値をもつ。しかし、貨幣や電子マネーの例が示すとおり、それが多くの人に信用され共有されることで量的な価値をもつようになる。実は経済にしろ、政治にしろ、現在世界を実際に動かしているのは、

こうした貨幣に代表される虚構の量的な価値を中心とした論理であり、その論理が社会全体の質的な価値の喪失を生み、環境問題や格差、分断の問題等多くの課題を生みだしている。その理由を説明しよう。

私たちが、月のウサギの例のように、主観的な存在より客観的な存在を価値あるものだと思いつくのは、客観的な存在のもつ量的な価値が「力」を生み出すからだ。私たちは力のある方を価値あるものと思いつくバイアスがある。ハラリは、近代から現代において科学革命が資本主義と結びついて発展していく世界（※9）を描き、その世界を「人間は力と引き換えに意味を放棄した」（※10）と表現した。先ほどと同様、ハラリのこの論述を、私の定義する二つの価値の言葉を使って表現するならば、科学も資本主義も量的な価値として発展し、人間は物質的な豊かさという「力」と引き換えに、質的な価値を放棄した、と記述できるだろう。量的な価値はその多寡で評価され、必然的に量的な価値を多くもつ者が強い力をもつようになる。かくして科学と資本主義という量的な価値を多く手に入れた者が、物質的な豊かさという「力」を手に入れ、勝者となった。こうした科学と資本

主義等の量的な価値を中心とした社会的な構造は、確かに多くの人間を豊かにし、災害や病氣から救った。しかし反面、多くの戦争を生み出し、現代においても環境問題や格差問題などの様々な課題を次世代に残している。

量的な価値が「力」を生み出すならば、質的な価値は「意味」を生み出す。質的な価値は意味の概念を前提にしており、意味の概念がなければ、質的な価値自体も存在しない。私たち一人一人の存在も、意味のあるかけがえのない質的な価値だ。そして、私たちは他の存在にも質的な価値すなわち意味を付与する。「悲しみ」は「大切な人」を失ったから、「机」は「快適に勉強するため」だと。意味は社会に向かうべき方向性を示し、人に人生の目的を与える。何のために生きるのかという、意味なしでは私たちは生きていけない。対して、量的な価値それ自体は意味を作らない。それでもモモたちと違って物質的な豊かさを生み出す量的な価値を捨てられない私たちは、意味を別に担保しようと、前章で述べた不完全な二元論を創り出した。主観的で質的な価値を、科学や資本主義等の社会を動かす量的な価値から分離し、個人主義という個人

の中での価値に閉じ込めた。そしてたとえ他者の苦しみにつながっていても、科学や資本主義は客観的で量的な価値であるから、主観的な自分の価値とは無関係であると都合よく安心した。例えば広島・長崎の原子爆弾投下は、物理学の責任ではないと。安心することで量的な価値を中心に社会を回し続けた。こうして社会全体を意味あるものとして包摂する質的な価値はデザインされず、科学や資本主義のもつ量的な価値と、個人主義以外の意味を持たない物質的な豊かさのみが肥大し、環境や格差等の問題が置き去りにされ、深刻化していった。私たちは、量的な価値を中心とする論理ではなく、環境や生物の多様性の意味、人間の存在や生きる意味、文化や歴史や哲学の意味などの質的な価値を中心とする論理を、量的な価値と共に社会にデザインしていかなければならない。例えば、質的な価値は多様性を志向する。多様性のあるサステナビリティな社会を実現するとは、質的な価値を社会全体にデザインしていくことである。

量的な価値は麻薬だ。貨幣に象徴されるように、人は量的な価値すなわち力を追い求める。そして、私たちは力を得ることで

豊かになり、幸福になると信じている。しかし、量的な価値をどれだけ手に入れても、私たちは決して幸福にならない。幸福とは質的な価値であり、私たちの存在もまた質的であるからだ。一本の木を、一人の人間を数値でしか評価できない社会に、どうして意味のある幸福な世界が作れるだろうか。幸福を目指すとは質的な価値を目指すことに他ならない。

4. 希望の物語、つなぐ声

クリスチャン・マスビアウは、マルティン・ハイデガーの言葉を引用して、「現実について、自ら身を置く社会的文脈を越えて物事を考えることはできない」と述べている（※11）。人間はこの社会的な文脈に従って存在に意味を付与し、それらの意味をつなげ、また新たな文脈を形成する。人間にとって文脈は意味のある質的な価値をもち、質的な価値を記述するものである。様々な文脈は、更に縦横に編まれることにより物語を生む。虚構であれ非虚構であれ物語とは、この世界を意味のある文脈で記述するものであり、物語自体も質的な価値をもつ。物語をこのように定義しよう。

「声」を「自分の内的な世界と外的な世

界をつなぐために発せられるもの」と定義する（※12）。従ってここでは、音声の意味だけでなく、文字や動作（手話など）としての声も含む。自分の内的な世界とは、自分の意識や思考、感情あるいは経験等を指す。私たちはこれらを外的な世界とつなげる意味あるものにしようと思いを発する。故に声は、話者によって与えられた意味があり質的な価値をもつ。

「物語」も「声」もその意味が、私たちの存在をつなげ、新たな社会的な文脈をつくる。善い物語や声は、私たちに善い社会や生き方のモデルを示し、勇気と希望を与え、協働を生む。量的な価値を中心に世界を動かすのではなく、善い物語や声を中心に世界を綴るのだ。

福島の大震災を訪れるニュースを見た。被災した人々が「何でもいいから声をだそう」と、互いを励ましている姿に胸をうたれた。悲しみでも怒りでも不満でもよい、明日への希望でも食べたいものでもよい。無口になるな。負けるな、とにかく声を出そう、と。やがてその声はクラウド・ファンディングという声になり、多くの人の支援につながった。声は大きな感謝になる。そして声は人々の心を結ぶ。艱難に打ち倒

されても立ち上がろうとする人々の物語は、私たちの怠惰を鞭打ち、私たちを奮い立たせる。私もまた、共に艱難に立ち向かうべきである。

これこそが物語の力、声の力である。私がかれまでに読んだ物語も同様だ。

エリック・カールはたくさんさんの絵本で、精神的で質的な存在は実在するのだから大切に持ち続けよ、と私たちを励ます。チャールズ・ディケンズは、量的な価値によって分断されていく世界を描き、そんな世界でも質的な希望があることを『オリバー・ツイスト』で示した。ドストエフスキーは『カラマーゾフの兄弟』で量的な価値に溺れる人間と質的な価値に救いを求める人間を対比した。イワン・カラマーゾフの大審問官の声は、今でも私たちのつくる量的な価値観の脆弱さを鋭く抉り出す。遠藤周作は『海と毒薬』で、量的な価値に溺れそれに翻弄されていく人間の弱さや醜さを描いた。夏目漱石は『こころ』で、生きる意味に関わる質的な価値（例えば明治の精神や倫理観等）の喪失と、その意味に救いを求めざるを得ない心の淋しさを、遺書という声をとおして表現した。『かみゆの孤城』の子どもたちは、最後に絆や思いという自分

たちを繋げる質的な価値を見つけることができた。オオカミサマは最初からそれは身近にあると声を出し続けた。そして『赤毛のアン』のアン・シャーリーは、いつだって質的な価値を希望とし、それに向かって進んだ。物語のラストで、大きな喪失にも負けず新しい夢に向かって走り出すアンの声は、私たちに質的な価値という希望をもつことの素晴らしさを教えてくれる。

「物語」は、この世界を質的な価値と量的な価値でどのようにデザインしていけばよいかを教えてくれる。「声」はその希望をつなぎ、時に私たちを叱咤する。物語や声は文字や言語で表されるだけではない。社会的文脈や文化、いや私たち一人一人の人生もまた物語であり、声によってつながるものなのだ。今日、生成AIは指数関数的に発達し、膨大な量的な価値（※13）を次々と生産し続けている。やがて私たちは、そうした膨大な量的な価値に飲み込まれ、アルゴリズムに支配されるのだろうか。そうではない。数値や生成AIの作り出す量的な価値にばかり目を向けず、もう一度人としての営みが創り出す物語に丁寧に目を向け、人の声を真剣に聞こう。その弛まさない努力こそが、数値やアルゴリズムという

量的な価値が支配しようとしているこの世界において、きつと希望となる。最後にその希望の物語を示そう。

5. 虹色のチョークという希望

図書館で社会福祉関係の本を探していたとき、『虹色のチョーク』という一冊の本が目にとまった。その本に描かれている日本理化学工業株式会社の物語(※14)は、質的な価値と量的な価値の優れたデザインを、私たちに提示してくれる。日本理化学工業は、従業員八〇人ほどのチョークを作る小さな会社である。社員のほとんどが知的障がい者であり、その雇用割合は七割を超える。本やテレビで紹介され、「日本ではいちばん大切にしたい会社」と呼ばれるようになった。この会社が「大切にしたい」と評価されるのは、障がい者の雇用率が高いからではない。この会社が「人間の幸せは人の役に立つ＝働くこと」という、働く人の質的な価値「働く幸せ」を目指しているからだ。そして「人間には役割があつても優劣はない」という大山隆久社長の声のとおり、障がいとは優劣という量的な価値ではなく、役割という質的な価値であり、「働く幸せ」を体現する彼らこそ、彼らしかで

きない仕事をする職人なのだ。この物語は、質的な価値だけでは終わらない。こうした従業員の仕事が会社の活力を生み出し、主力商品の「ダストレスチョーク」は日本のシェアの半分を占め、色彩豊かな新しい筆記用具「キットパス」も消費者から高い評価を得るようになった。大山泰弘会長は、長年の障がい者雇用が十億円の節税に繋がったとして、渋沢栄一賞を受賞する。会長は誰もが働いて、幸せになる社会「皆働社会」を提案する。それは高齢であつても、障がいがあつても、病氣であつても、誰もが働いて誰かの役に立ち自ら幸せを感じられる社会である。それが決して不可能ではないことを、そしてそれが質的な価値を中心に、量的な価値を包摂したデザインから生まれることを、日本理化学工業の物語は証明している。

マシアウはこれからの社会は、理系的なSTEM(科学、技術、工学、数学)の思考よりも人文知(文学、歴史、哲学、芸術など)が大切になると考え、ビジネスに人文知を組み入れた新しい戦略コンサルティング会社を立ち上げた(※15)。彼は「センス・メイキング」という考え方をを用いて、人文知に基づく人間的で文化的な洞察力が何よ

り大切になると説明する。これからもあらゆる分野で、こうした人間の質的な価値が、量的な価値と共に社会全体にデザインされていくだろう。

「この石は世界に一つ」これは質的な価値である。空ちゃんは今でも物語を作り続けているだろうか。いつか私を救ったように、空ちゃんの物語が世界の希望になるかもしれない。『モモ』の物語は、質的な価値を取り戻す希望の物語でもあった。モモに負けないように、一人ひとりの質的な価値が大切にデザインされる社会に向けて、私は私の「声」を出し続けていこうと思う。

【引用文献及び注】

(※1) 仏教の教義の一つ「色即空」より命名した。「色」とは宇宙に存在するすべての形ある物質や現象を意味し、対して「空」は恒常な実体がないという意味である。

(※2) ここでいう「存在」は、私たちが日常生活レベルで、知覚や認識または意識することが可能な対象全てを指す。存在について正しく定義することは、フッサールの現象学的還元による存在やハイデガーの述べる存在など、哲学的に非常

に難解である上に、現代においてもチャーマーズやガブリエルなど様々な見解があり、私の手におえそうにない。本稿では、全て私たちが日常生活で使っているレベルで、存在という言葉を使用した。以下同じ。

(※3) デイヴィッド・J・チャーマーズ『リアリティ+ パーチャル世界をめぐる哲学の挑戦』上下巻、NHK出版、二〇二三年、上巻二四三ページ

チャーマーズは、この本では物質と心(精神)の両方を基本要素とするデカルト的で厳密な意味として二元論の言葉を使っている。しかし、私がここで使っている二元論という言葉は、デカルト的な厳密な二元論ではなく、単純に客観的な存在と主観的な存在の二つが存在している、という程度の意味としての二元論である。

(※4) マルクス・ガブリエル『新実存主義』岩波新書、二〇二〇年、三〇ページ
私が本稿で述べた物理的で客観的な存在と精神的で主観的な存在の二つの存在のジレンマについて、ガブリエルはこの本で「ギャップ」とよんでいる。ガブリエルのいう「ギャップ」には、「日常的な人

間像」と「科学的人間像」、「一人称の視点」と「三人称の視点」、「厚い概念」と「薄い概念」等、様々なものが含まれる。

(※5) 同右、三一ページ

ここではガブリエルの定義する「自然主義」の言葉を引用して使用した。ガブリエルは、自然主義を幾つもの重層的な主張の総体として捉えており、本稿ではその中心的な形而上学的自然主義(唯物論)と認識論的自然主義の二つの主張を取り出して説明に使った。

(※6) チャーマーズ同著、下巻四二・四三ページ

チャーマーズは「意識」を、あらゆる主観的経験が統合され、私であるという意識が作られると説明している。主観的経験とは、様々な意識の流れ(考える、推論する、自分に話しかける)の経験、視覚経験や聴覚経験、身体経験、感情経験、決断、行動などを指す。また、チャーマーズは、意識は主観的経験の問題であり、その主観性が、自然主義などの客観的な説明を難しくしていると述べ、このことを「意識のハードプロブレム」と表現した。

(※7) 石井茂『ハイゼンベルクの顕微鏡

不確定性原理は超えられるか』、日経BP社、二〇〇六年、二三五ページ
不確定性原理を表す、ハイゼンベルクの不等式は次のように表すことができる。

$$\epsilon(Q)\epsilon(P) \geq \hbar/4$$

$\epsilon(Q)$ は位置の測定に伴う誤差であり、 $\epsilon(P)$ はその測定に伴う運動量の攪乱、 $\hbar$ はプランク定数である。この式によれば、位置の誤差と運動量の攪乱を一定数以下にできない、それはつまり粒子の位置と運動量を同時に特定できないことを意味する。従って粒子は同時に確率的に多くの場所に存在することになるが、経験則が示すとおり、観測された瞬間に位置は確定する。よって量子力学では、人間の観測が重要な意味をもつといえる。

(※8) ユヴァル・ノア・ハラリ『サビエンス全史 文明の構造と人類の幸福』上下巻、河出書房新社、二〇一六年、上巻一五一ページ
ハラリは、お金や国家、政府や経済などについて、もともとは人間が作り出した主観的なものであるが、それを多くの人間が信じることで客観的になるとして、これを「共同主観的な現実」と定義している。ハラリはその後の言葉を同じ意

味で「虚構」という言葉と言い換えて使っているため、本稿でも以後は「虚構」という言葉で表すことにした。ただし、ハラリーは量的な価値や質的な価値という言葉は使っておらず、私が本稿で述べた考えは、ハラリーの捉え方と少し違っていることを断っておく。

(※9) 同右。この記述は主に下巻・第四部「科学革命」を要約したもの。

(※10) ユヴァル・ノア・ハラリ『ホモ・デウス テクノロジーとサビエンスの未来』上下巻、河出書房新社、二〇一八年、三二ページ

(※11) クリスチャン・マスピアウ『センスメイキング 本場に重要なものを見極める力』プレジデント社、二〇一八年、五〇ページ

ハイデガーの言葉は、文中のマスピアウの文より引用した。

(※12) アン・カーブ『声』の秘密』草思社、二〇〇八年、一三ページ

カーブは「声」とは「内なる世界と外なる世界をつなぐ架け橋」と定義している。この言葉を参考に本稿でも定義した。

(※13) 生成AIは、データとアルゴリズムで文章や絵、音楽を作り出すので、そ

の作り出したものの自体は、本来、意味のない量的な価値しかもたないと考えられる。しかし、人間がそれに意味を付与することで、生成AIが作り出す文章や絵も質的な価値をもつようになる。逆に言えば、生成AIが作り出すものは、人間が意味を付与しない限り、それは単なるデータの羅列でしかない。対して、人間が作る文章や絵、音楽は、最初から目的をもち、目的に沿ってそれに意味を持たせ、創り出すものである。よって人間が作り出すものは、最初から意味のある質的な価値をもつと考えられる。

(※14) 小松成美『虹色のチョーク 働く幸せを実現した町工場の奇跡』幻冬舎、二〇一七年

(※15) マスピアウ同著

クリスチャン・マスピアウは人間科学を基盤とした戦略コンサルティング会社REDアソシエーツの創業者。マスピアウはこの本で、スターバックスの成功等を例に挙げ、人文科学の大切さを述べている。

【参考文献】

① 丸山俊一『マルクス・ガブリエル 危機

の時代を語る』NHK出版新書、二〇二〇年

② エリック・カール『パパ、お月さまとて!』偕成社、一九八六年

③ ミヒヤエル・エンデ『モモ』岩波少年文庫、二〇一五年

④ チャールズ・デイケンズ『オリバー・ツイスト』(上下巻)、角川文庫、二〇〇六年

⑤ ドストエフスキー『カラマゾフの兄弟』上中下巻、新潮文庫、一九七八年

⑥ 遠藤周作『海と毒薬』新潮文庫、二〇二一年

⑦ 夏目漱石『こころ』集英社文庫、一九九一年

⑧ 辻村深月『かがみの孤城』ポプラ社、二〇一七年

⑨ L・M・モンゴメリー『赤毛のアン』講談社文庫、二〇〇五年

【資料 1】 筆者の考察による量的な価値と質的な価値の分類

	量的な価値	質的な価値
その価値をもつ存在	客観的な存在	主観的な存在
価値の記述方法	数値、数式、アルゴリズム	言葉、文脈、物語
価値を対象とする学問分野	科学、数学、技術、工学、経済学など	哲学、倫理学、言語学、人文学、歴史学、芸術など
価値が生み出すもの	力	意味
価値の志向	同一性 ^(注1)	独自性、多様性 ^(注1)
価値の依存	成長 ^(注2)	持続 ^(注2)
価値の測定	計測可能、比較可能	計測不可能、比較不可能
価値の連続性	不連続、デジタル	連続、アナログ
価値の因果関係	因果的 ^(注3)	非因果的 ^(注3)
価値の評価	相対的 ^(注4)	絶対的 ^(注4)
価値の思考方法	アルゴリズム的な計算、カテゴリー化 ^(注5)	批判的思考、創造的思考、概念的思考 ^(注5)
代表的な具体的事物① ^(注6)	物質・エネルギー	存在・意識・自我
代表的な具体的事物②	特化型の知能 ^(注7) ・知識	汎用的な知能 ^(注7) ・感情
代表的な具体的事物③	貨幣、市場、株式、電子マネー、クレジット、貿易、ビジネス	道徳、倫理、規範、自由、美学、礼儀、マナー、教育
代表的な具体的事物④	コンピュータ・AI（生成AIを含む）	人間の思考力 ^(注8)
代表的な具体的事物⑤	データ・薄い情報 ^(注9)	厚い情報 ^(注9)
例① 机	クオーク、レプトン等でできた物体、商品としての机	勉強のための作業台
例② 赤色	RGB表色系において700 nm の波長	イチゴの色、私の好きな色
例③ 水	H原子2個とO原子1個の分子からなる物質	びちよびちよしたものの、私の命を支えるもの
例④ 悲しい	脳内のある電気信号	大切な人を失った時の気持ち
例⑤ お金	貨幣・電子マネー・貯金・給与	物の価値や労働の価値を表すものとしてのお金の概念
例⑥ 国家、地域社会	国家や社会の構造やシステム、機能。実際の運用。 ^(注10)	国や政府の概念、コミュニティやアイデンティティとしての意味

(注1) 量的な価値は数量の多寡にあるから、同一性を志向する。質的な価値は独自性にあるから、多様性を志向する。

(注2) 量的な価値は力を生み、それは成長に依存する。質的な価値は意味を生み、それは継続・持続に依存する。

(注3) 量的な価値はアルゴリズムであるから因果的である。質的な価値は文脈等で記述されつつも、それは必ずしも因果関係ではない。

(注4) 量的な価値は数量の多寡で評価されるため、比較は相対的になる。質的な価値は、それ自身が唯一無二であるから絶対的に評価される。

(注5) 参考文献①のP76より、マルクス・ガブリエルの人工知能はパターンを認識できるわけではなく、既に存在するパターンを体系化する、という発言から。質的な価値の方は引用文献※11のP82より、クリスチャン・マスビアウの論を使用。

(代表的な具体的事物を量的と質的に分類したが、二つの価値は一つの事物の見方の違いによるもので、実際に事物は量的な価値も質的な価値も両方持つことが多い。ここでは、現在おもにどちらを主として使われているかという視点で分類した。よってその事物がどちらか一方の価値しかもたないわけではない。))

(注6) 引用文献※4のP81。マルクス・ガブリエルのいう「標準的な自然主義」の立場に立った時の分類。

(注7) 引用文献※3の下P44より、デイヴィッド・J・チャーマーズの論による「特化型の知能」と「汎用型の知能」より。

(注8) 人間の思考力は、知識の体系化や精緻化から生まれるという見解を受けて。

(注9) 引用文献※11のP186より、クリスチャン・マスビアウの「センス・メイキング」の考え方より。

(注10) 例えば一つ一つの政策の内容自体は質的な価値といえるが、その政策の運用や、政策を実行するための構造等は数値の分配やアルゴリズムで表すことができるため、量的な価値をもつといえる。